

【緑地を楽しむ本】

『大森林の少年』

キャスリン・ラスキー作 ケビン・ホークス絵 灰島かり訳 あすなろ書房



この季節、ここ数年、インフルエンザの流行がニュースになっていましたが、今年はノロウイルスが猛威をふるってますね。

1918年の冬、アメリカ・ミネソタ州ダールズの町では、悪性のインフルエンザが流行し、多くの人が亡くなりました。

有効な抗生物質のなかった当時、「父さんと母さん」は息子のマーベンだけでも死なせるわけにはいかないと、10才の息子を町から遠ざけることにします。ダールズから車で5時間のところにある、ミネソタ州ベミジにいる友人を頼ることにします。そこは、木材伐採の現場です。10才の子どもですから、伐採の仕事はできませんが、計算が得意だから帳簿係ができるというのです。

車で着いたベミジの駅は、見渡す限りの雪原の中にポツンとプラットホームがあるだけで、そこから8キロ先のはるかかなたの森にむかって、マーベンは1人で

キーで行かなければなりません。さらに、その伐採現場はカナダから来ている労働者ばかりなので、会話はほとんどフランス語だということです。「ボンジュールっていいよ」ロシアからの移民だった母さんは言います。「あとはだんだんにおぼえればいいわ」

この話は、作者のお父さんの実際の体験を元に描かれています。10才の子どもを1人で、言葉もろくに通じない森林伐採の現場に送り出す親の覚悟、自分の食いぶちは自分で稼ぐという10才の子ども覚悟、森の入口で駅から8キロの雪原をスキーで来る子どもを待つおじさん…あたりまえのように描かれているのですが、色々な意味で圧倒されます。

マーベンは仕事の合間に、スキーで美しい雪の森を散歩するのですが、その様子が山スキーの楽しさを思い出させてくれます。緑地にも、今年も雪が降るでしょうか…楽しみです。

※現在絶版です、図書館で読んでください。

(遠藤)